中学校における「日本美術・文化」の教材開発と指導
－鑑賞教材および表現と鑑賞の一体化－

酒　井　啓　子

「現地の高校で美術を選択したら、『日本人なんだから日本文化を紹介しなさい。浮世絵とゴッホの関係をレポートするように。』と言われた。・・・もっと日本美術について勉強しておけばよかった。」留学中の教え子から届いたメールはちょっと恨みがましかった。中学校では高校入試に出る文化史についても意識しながら日本文化を授業で取り上げてきた。しかし、知識を詰め込むだけで、日本文化のよさやおもしろさについて味わうまでには至らなかったのだろう。日本文化という課題を出され、戸惑っている教え子に、自分の授業の甘さを痛感させられた。

畳や生け花などの住文化、和菓子やにぎりめしなどの食文化、けんだま、こまなどの玩具、七五三や成人式の着物など、普段の生活の中に日本美術・文化は息づいている。身近なところにある日本文化を見直すことが、日本美術・文化への興味につながり、ひいては自国の文化を大切にする気持ちに育っていくのではないだろうか。

新学習指導要領では、２・３年の内容であった日本美術の鑑賞が１年の内容に含まれるようになった。本研究では、今まで実践してきた日本美術・文化に関する授業を年間指導計画や研修講座等から振り返り、身近で親しみやすい教材の改良と開発を行った。

〈キーワード〉　新学習指導要領、水墨画、仏像、絵巻物、掛け軸、表現と鑑賞の一体化

Ⅰ　主題設定の理由

小学校の新学習指導要領では、身の回りの作品、身近な美術作品、我が国や諸外国の親しみのある作品、暮らしの中の作品などを鑑賞するという文言が含まれている。新学習指導要領解説によると、「自分の身の回りのように近い存在として感じている場合は、校内に展示してある作品、大人の作品なども鑑賞の対象とすることも考えられる。」とある。身近な美術作品には、「日用品、伝統的な玩具、地域の美術館の作品」などが含まれ、暮らしの中の作品としては、「造園や建物、工芸品」などを挙げている。また、鑑賞の方法として、「作品と同じ姿勢をとるような鑑賞活動（ジェスチャーゲーム）や、印刷物や絵はがきなど（アートカード）を数多く集めてそれを基にゲームをする鑑賞活動」など様々な方法が挙げられている。さらに「表現と鑑賞はそれぞれに独立して働くものではなく、お互いに働きかけたり、働きかけられたりしながら、一体的に補い合って高まっていく活動である。」と表現と鑑賞の一体化について述べられており、平成23年度の図画工作の教科書には、名画の画風や作家の気持ちに寄り添って作品を制作する授業が紹介されている。

平成23年度から使用される小学校５・６年の国語の教科書（光村図書）には、「鳥獣人物戯画」や「風神雷神図屏風」が取り上げられている。小学校高学年では図画工作に限らず、他教科に日本美術が取り上げられていることにも驚かされる。

中学校の新学習指導要領では「身近な地域や日本及び諸外国の美術の文化遺産などを鑑賞」と明記されているが、新学習指導要領解説によると「対象には伝統的な工芸品、祭りの山車、建造物、家庭にある掛け軸や扇子、風呂敷なども考えられる。」とある。また「一般に生徒は、西洋の美術については関心も高く、よく知っているが、日本や文化面で日本とかかわりの深いアジアについては関心が低い傾向にあるので、関心などを高めながら日本とアジアの美術を取り上げることが大切である。」と述べている。

教え子からメールをもらった経験と重なり、はっとさせられた。教員自身も「日本美術・文化の授業は、知識がないとできないのでは。」とか「特別な準備が必要なのでは。」と思い込んでいないだろうか。そこで、表現と鑑賞の一体化をねらい、生活に溶け込んでいる日本美術・文化に気付いて楽しめるような教材開発を研究テーマとして設定した。

Ⅱ　研究の目標

表現のための鑑賞、独立型の鑑賞の中にある「日本美術・文化」にはどのようなものがあるか、前任校での年間指導計画を振り返り、３年間を見通した日本美術・文化の学習について平成23年度の計画案を作成する。

日本美術・文化に関する教材の中で前任校で取り上げていた授業について検証し、鑑賞教材の改良、開発を試みる。

Ⅲ　研究の方法

前任校で実施していた年間指導計画から、日本美術・文化に関する授業について考察する。

本研究所の業務である研修講座や巡回研修などで、前任校で実践した「仏像ワールドへようこそ」「水墨画に挑戦」を紹介し検証する。また、県内外の公開授業や研修講座等からのアイデアやヒントを活かし、新たな教材を作成する。

Ⅳ　研究内容

１　３年間を見通した日本文化・美術の学習について

日本美術については自分自身が不得手な分野ではあったが、他校の美術教員の協力を得て意識的に日本美術の作品や授業を取り入れてきた。表１は平成20年度の年間指導計画である。太字は日本の美術・文化を意識した内容が含まれる文言である。

また、年間を通して意識して欲しいテーマをオリエンテーション等で紹介している。現行の学習指導要領に合わせて、２年生は「遠近感・日本を意識して」をテーマに１年間の授業を行った。

表１

	１年（45時間） 植物・生き物を意識して	２年（35時間） 遠近感・日本を意識して	３年（35時間） 自分を意識して
表現	・オリエンテーション① ・３原色で自己紹介カード③ ・偽物野菜作り⑧ ・**お面**作り⑬ ・祝入学卒業レタリング⑪ ・**浮世絵**の成り立ち② ・鉛筆スケッチ③ ・偽物**和菓子**作り①	・オリエンテーション① ・遠近感で表す⑧ ・部活動のマーク⑦ ・**浮き彫り**彫刻⑨ ・**水墨画**に挑戦④ ・**着物**の柄のデザイン① ・**見返り美人**は何してる？①	・自画像⑦ ・**切り絵**⑧ ・曲のイメージを表す⑧ ・手を彫る⑥ ・現代版**鳥獣人物戯画**①
鑑賞	・アルチンボルドの絵① ・**仏像**ワールド① ・**漫画**から**ジャパニメーション**へ ①	・空港のピクトグラムクイズ① ・**北斎**と遠近法 ⓪.⑤ ・日本の**建具・組み木** ⓪.⑤ ・レオナルド「最後の晩餐」① ・ピカソ「ゲルニカ」を読む①	・ダリ、マグリットの絵① ・**文化史**クイズを作ろう② ・印象派と**浮世絵**① ・ゴッホの自画像①

日本美術・文化を鑑賞したり体験したりする箇所が年間を通して３～４カ所あり、日本美術・文化の鑑賞に関しては年間３、４時間程度は時間を確保できた。鑑賞の時間は授業時数の５分の１程度が適当とされていたので、西洋文化や現代のデザイン等の鑑賞や生徒作品の鑑賞と合わせると鑑賞の授業時間数は妥当である。独立型の鑑賞については作品の選定が曖昧で、地域の美術館の企画展示作品、学校行事や他教科と関連づけた作品など、生徒の実態や興味に合ったものを扱った。

表２は平成23年度の年間指導計画案である。今まで他クラスやクラス内での進度差を調整するために、短時間でできる題材を準備していた。そこで、平成23年度の年間指導計画では、ちょっとした隙間の時間に活用できるような日本美術・文化の授業を充実させるべく、点線の下に書き直した。また、今まで独立型の鑑賞だけを別枠にしていたが、表現の枠の中は表現のための鑑賞が含まれるので、平成23年度の年間指導計画では独立型の鑑賞との境界線を取り除いた。２年では「遠近感・日本」のキーワードを意識して授業を考えてきたが、３年間の中でバランスよく取り入れるように計画を直した。学校行事や生徒の実態、改訂された教科書に合わせてさらに改良する必要がある。

表２

	１年（45時間） 植物・生き物を意識して	２年（35時間） 環境・空間を意識して	３年（35時間） 自分を意識して
表現 ↕ 鑑賞	・オリエンテーション① ・３原色で共同制作① ・偽物野菜作り⑧ ・動物彫刻⑬ ・祝入学卒業レタリング⑪ ・**浮世絵**の成り立ち② ・いろいろスケッチ③ ・**越前焼**で植木鉢作り③ ・アルチンボルドの絵① ・**仏像**ワールド① ・**日本の漫画**・アニメ①	・オリエンテーション① ・遠近感で表す⑧ ・部活動のマーク⑦ ・**浮き彫り**彫刻⑨ ・**水墨画**に挑戦⑤ ・空港のピクトグラムクイズ① ・**北斎**と遠近法① ・日本の**建具・組み木**① ・レオナルド「最後の晩餐」① ・ピカソ「ゲルニカ」を読む①	・音のある自画像⑧ ・**切り絵**⑤ ・共同絵画③ ・たまごのあるBOXアート⑧ ・オリジナル**うちわ**作り⑥ ・ダリ、マグリットの絵① ・**文化史**クイズを作ろう② ・印象派と**浮世絵**① ・ゴッホの自画像①
表現 ↕ 鑑賞	**【日本美術・文化の短時間教材】** ・偽物和菓子作り（図１） ・着物の柄のデザイン ・見返り美人は何してる？（図２） ・掛け軸 ・現代版鳥獣人物戯画 ・家紋 **図１**	 **図２**	

高校では美術は選択科目になり、美術に触れるのは、ほとんどの生徒にとって中学校３年間だけであることを考えると、中学校で自国の文化、地域の文化について意識することが大事である。美術の年間授業時数から考えると、日本美術・文化の鑑賞について独立した対話型の鑑賞時間数を増やすより、制作に結びつく鑑賞や追体験を取り入れた鑑賞など、表現と鑑賞の一体化を意識した授業を吟味していく

べきではないだろうか。そこで、今まで授業の中で取り組んできた「仏像ワールドへようこそ」「水墨画に挑戦」について振り返り、より充実した授業にしていく方策をまとめた。

２　研修講座、巡回研修等での日本文化・美術の授業

(1)　「仏像ワールドへようこそ」

小学校では修学旅行と社会の歴史の勉強とを兼ねて仏像について学習していることが多い。「仏像ワールドへようこそ」は修学旅行や社会の歴史の授業などとの連携が図れる授業として、巡回研修で提案した。

図３、図４は「仏像ワールドへようこそ」のスライドの一部、図５、図６は「仏像ワールドへようこそ」での演習の様子と作品である。

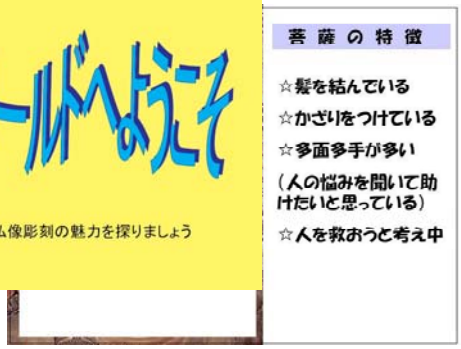

図３　　**図４**　　**図５**　　**図６**

「仏像ワールドへようこそ」は如来、菩薩、明王、天の４種類の仏像の特徴について、水戸黄門のキャラクターを重ねながら紹介するスライドである。スライドで仏像の特徴をつかんだ後、グループ毎に仏像画を描き、どの種類かを当てるゲームをすることで、仏像表現の面白さを理解することをねらっている。

平成21・22年度の巡回研修・要請研修を行った28件のうち７校で、「仏像ワールドへようこそ」を紹介した。様々な鑑賞授業の一例としてスライドのみを紹介したり、仏像を描くゲームを体験したりしたが、以下のような感想があった。

○他教科とつなげての図工もできると楽しくなった。
○ゲームなどを取り入れ楽しく特徴がつかめそう。
○鑑賞というと難しいイメージがあったが、いろいろな方法を知る事ができて参考になった。
○是非高学年担任になったら取り入れてみたい。

小学校の新学習指導要領解説には様々な鑑賞の方法が挙げられてはいるが、児童作品の鑑賞会が多く、それ以外の鑑賞はあまり実践されていない。「仏像ワールドへようこそ」は、様々な鑑賞活動を考えるきっかけ、日本美術・文化の授業に興味をもつきっかけになった。

「仏像ワールドへようこそ」を授業で実践した授業者の感想を得たので紹介する。

Ａ小学校
・小学６年生で実践
・修学旅行の事前学習に関連づけて授業を展開
・土の触感が楽しめる紙粘土で仏像（おじぞうさん）を作り、校内に展示したり敬老の日にプレゼントしたりした。

・行事とからめて授業を合わせていくことで仏像鑑賞が楽しくできた。
・各自が仏像を作ることで造形の面白さを楽しむことができた。

B中学校
・中学２年生で実践
・京都校外学習と関連づけて授業を展開
・スライドでは仏像の種類を水戸黄門のキャラクターに重ねて紹介するよりも、漫画のキャラクターに重ねて紹介した方が反応がよかった。
・グループ対抗の仏像画作成を楽しくできた。
・「仏像の種類を当てるクイズ」も生徒たちは楽しんでいた。

スライドについては、修学旅行や校外学習の事前学習、社会科の教科書との関連、地域の学習、守護神制作のための導入など、学校・生徒の実態、目的に合わせて画像を作るともっと児童生徒の興味・関心を持たせることができる。生徒の好きな漫画のキャラクターに重ねて紹介する工夫も必要である。

スライドの後に、生徒の実情に合わせてどういう活動に発展させていくかで、表現と鑑賞の一体化を目指すことができる。小学生には短時間でおおらかに表現することが向いているため、紙粘土で仏像を作るような表現活動と結びつけることが有効であり、知的好奇心の強い中学生には、仏像の種類当てクイズを楽しむような独立型の鑑賞に結びつけることが可能である。画像を見て話し合うことは言語活動の活用にも通じる。電子黒板やパソコンが導入されている今、拡大縮小の可能なデジタル画像は大いに活用できる。

「仏像ワールドへようこそ」を授業で活用するためのポイントを以下にまとめた。仏像についての知識は、教師には多少必要であるが、図画工作・美術の授業で児童生徒に難しい言葉を覚えさせる必要はない。「仏像ワールドへようこそ」は、仏像が日本美術・文化のひとつであると認識するきっかけであり、どう発展させていくかが教員の個性であろう。

1　関心・意欲を高めるために
〇美術の授業（制作に入る前の参考資料として）
〇学校行事（修学旅行・校外学習・学校祭などとの関連）
〇他教科（社会の文化史・国語の古文・総合的な学習など）
2　仏像の種類・表現の豊かさを理解するために→鑑賞の深まりを目指して
小学校・・・紙粘土でかんたん仏像作り→展示可能
中学校・・・１人１体仏像を描く→個人で没頭できる
グループで１体仏像を描く→ちょっとした共同作業（言語活動の充実）
仏像の種類当てクイズをする→ＩＣＴの活用
3　仏像の表現を制作活動へ活かすために→表現と鑑賞の一体化を目指して
小学校・・・紙粘土で仏像（おじぞうさん）作り
中学校・・・お面作り（〇〇の神様・妖怪？妖精？）
木版画制作（わたしの守り神）

(2)　「水墨画に挑戦」－墨の濃淡を生かした水墨画体験－

水墨画は平成23年度の図画工作の５・６年の教科書に取り上げられており、低学年、中学年には若

干難しいと思われる内容である。そのため、巡回研修での水墨画の実施件数は６件であった。鑑賞と同じくニーズは少ないが、一度体験することによって興味をもつきっかけになった。

図７は巡回研修で教員が制作した水墨画である。竹とあじさいを一斉に描き、その後鳥か植物を選んで手本を見ながら描いた。濃い色の画用紙を台紙にすること、消しゴムと爪楊枝で印を作り押印することで、より一層作品が引き立った。

図７

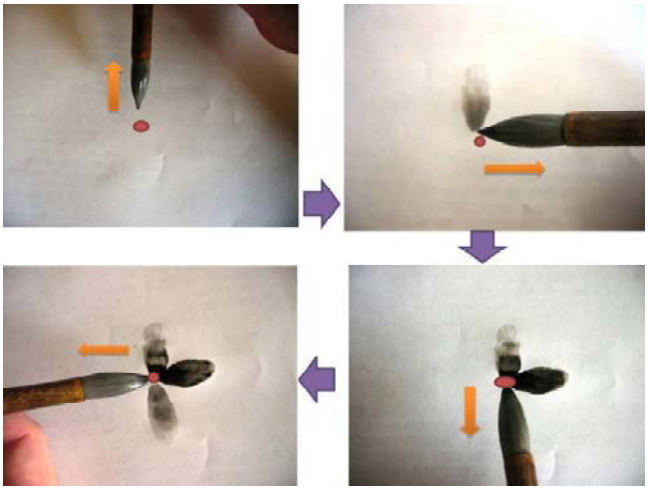

図８

水墨画を巡回研修で体験した感想には以下のようなものがあった。

○すごく難しいものだと思っていたが、意外とやりやすかった。
○墨の特性や伝統への興味を高められそう。
○低学年でも筆や墨に親しむことにより毛筆・習字につなげていけそう。
○社会科との関連で室町時代の墨絵について学習したところなので早速図工で挑戦してみたい。

水墨画が手軽にできるように、あじさいの絵の描き方、竹の絵の描き方をスライドで作成した。図８は作成したスライドの一部である。授業では指導者が児童生徒の前でやってみせることが大変重要であり、巡回研修でも授業と同じように一斉指導の方法をとったため、スライドを活用する機会を失してしまった。巡回研修などの教員に紹介するスライドとしてでなく、授業で生かせるようなスライドに改良し、現場で検証していきたい。

図画工作科研修講座では、先行実施した授業について実践紹介をいただいた。「水墨画の作品を鑑賞し、墨の濃淡や筆の勢い、にじみやぼかしなどの技法について話し合ってから、造形遊びのように墨による制作活動を楽しんだ。」ということだった。作品を見て技法について話し合う時間が、「描いてみたい」という関心・意欲を高めるが「水墨画に挑戦」にはそれがない。そこで、水墨画の導入に生かせる鑑賞教材を開発した。

(3)　「みんなでつなごう絵まきもの」－筆の線を生かした白描画体験－

福井県内の小学２年生を対象に実施した。鳥獣人物戯画の一場面をじっくり見てお話を想像する対話式の鑑賞でなく、表現と鑑賞の一体化をねらいグループで絵巻物を作る活動を取り入れた鑑賞となった。

図９、図10は実際の活動の様子とできあがった絵巻物の一部である。筆の流れやかすれ、線が太くなったり細くなったりする感覚が楽しめる筆ペンを利用した。筆の流れを生かす気配りは２年生には難しかったようだが、いつもとは違う感じで描くことは体感できた。

授業を参観した教員からは以下の様な感想をいただいた。

○２年生にとって美術絵画を見て話し合うことは難しいけれど、今回のように動物や遊びなど身近なものをテーマにした作品を使うと興味・関心をもてていい。
○実際の絵巻物を見て自分たちもそれを班で協力して作り、体験することで、楽しさおもしろさを味わわせるところがよかった。絵巻物のことが実感できたと思う。
○筆ペンで描くとマジックなどの線とは違って味わいが出てよかった。

授業後の児童の感想には以下のようなものがあった。

○むかしの絵本のことを絵まきものというのがわかりました。
○みんなときょうりょくしてやったら、じょうずな絵まきものができたから、おもしろかったです。
○ふでをつかうのがちょっとむずかしかったけど、絵がじょうずにかけたのでたのしかったです。

図９

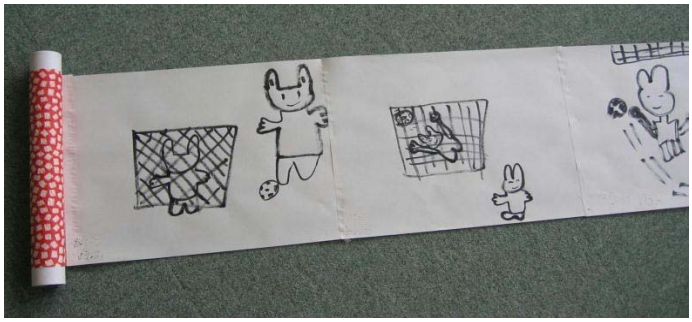

図10

授業のはじめに、鳥獣人物戯画第１巻のレプリカを見せた。低学年の好きな忍者漫画にも登場する巻物には親しみを感じており、実際に絵巻物を目にしたことで、興味・関心をもたせることができた。次に電子黒板で絵巻物を拡大し、どんな様子が描かれているか話し合い、動物が遊んでいる絵巻物をグループ制作した。動物が主人公の物語は国語や道徳の授業で扱われており、低学年は動物の主人公に自分を投影させることが好きである。そのため動物を題材にした鳥獣人物戯画は２年生には適した題材であった。

初めは、児童たちは何の動物の絵にするか、何の遊びをしている絵にするかで悩んでいたが、１人が描き始めると、つられるように同じような絵を描きだしていた。そのうちにそれぞれが動物の遊ぶ世界に入り込んで描いていった。魚釣りやサッカーゲームの続きなど、自分の物語を夢中になって描く児童がいる一方、描くことに強い抵抗を感じる児童がいて、題材云々以前の問題である言葉かけの難しさを考えさせられた。また、「つなげる楽しさ」という行為に夢中になる児童もいて、表現と鑑賞の一体化に「つなげる」造形遊びが加味されたものとなった。

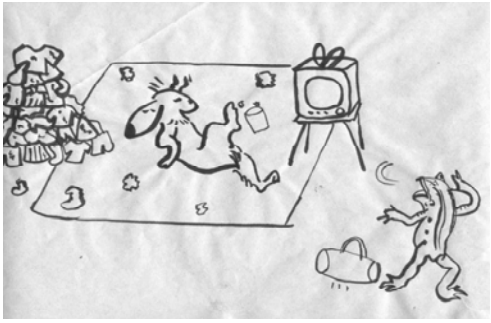

図11

図12

図11、図12は、中学３年生が描いた「現代版鳥獣人物戯画」である。彼らは、現代の生活（アイデア）を描くだけでなく、動物を鳥獣人物戯画の絵そっくりに描き写すことに重きを置いていた。小学２年生は動物と自分を重ね合わせ、ふだん遊んでいる様子を素朴な線で描いており、鳥獣人物戯画の動物をそっくりまねようという意識はない。

鳥獣人物戯画は平成23年度に県内で採用される国語、図画工作の教科書にも登場するが、中学校の美術、社会の教科書にも日本の漫画の原点として紹介されている。小学校でも中学校でも作品に触れる機会があるが、作品の取り上げ方を変えることで、飽きることなく楽しめる題材であると確信した。授業の流れとしては「もっと話合い活動の時間を長くとるべきだ。」という意見があったが、表現と鑑賞の一体化を考えると制作活動の時間が十分にあってよかった。

(4)　「和の世界～掛け軸」「制作者日記を書こう」

水墨画の技法体験、鳥獣人物戯画を使った白描画体験の実践などから、水墨画制作の導入に活かせる鑑賞教材の必要性を感じた。そこで、日本美術・文化の教材開発として水墨画の鑑賞に活用するスライドを作成した。

日本文化の特徴として、屏風、絵巻物、掛け軸、扇子など、運搬や片付けが安易なものが発達してきたことが挙げられる。新学習指導要領解説にも地域にある伝統的な掛け軸が、身近な地域の文化遺産の鑑賞対象として挙げられていることもあり、福井県立美術館所蔵作品の島田墨仙、横山大観の作品などを選んだ。

図13、図14、図15は作成したスライドである。

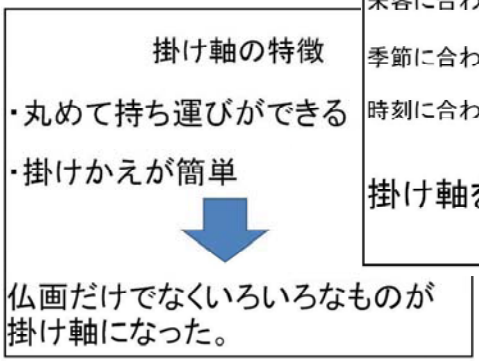

図13

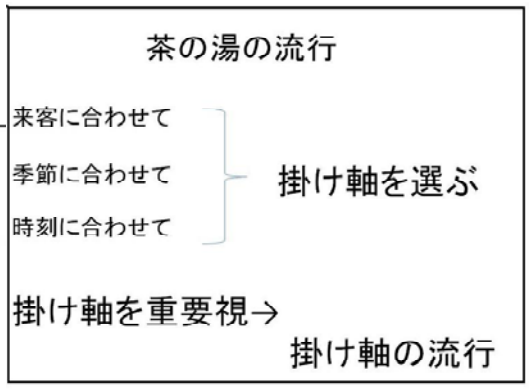

図14

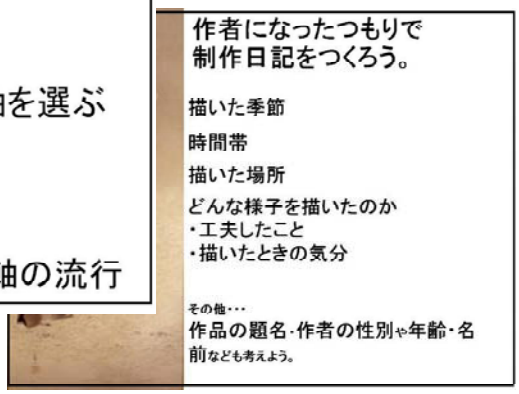

図15

「和の世界～掛け軸」のスライドとそれを活用した授業案について、福井市内の中学校美術教員に感想を求めたところ、以下のような意見・感想があった。

○制作者日記を作成する活動は他の鑑賞授業にも活かせる手法である。
○日本独特の美意識や制作の手法について深く入るのであれば、中学校２年生での授業がふさわしい。
○「掛け軸」の鑑賞としてならスライドは使える。
○話合いのルールが必要。
○水墨画の授業なのに掛け軸の授業になっている。
○水墨画に興味を持たせるのなら雪舟や大観などの歴史的に有名な作品をとりあげるべき。

以上の意見･感想を参考に、「和の世界～掛け軸」と「制作者日記を書こう」の２つに分けて再構築した。

「和の世界～掛け軸」
1　掛け軸のおこり
2　掛け軸の選び方
3　行事に合わせて選ぶ掛け軸クイズ

「制作者日記を書こう」
1　島田墨仙について
2　「秋夕」の鑑賞（秋夕の制作者日記から作品を当てる）
3　「杜鵑」の鑑賞（制作者日記を班ごとに作り、班による解釈の相違に気付かせる）
4　班ごとに水墨画を選んで鑑賞（制作日記作り）
5　制作者日記発表会

新学習指導要領解説には、中学１年生の「身近な地域」における鑑賞の対象として掛け軸も挙げられているので、身近な文化体験というところであれば１年生でもできる内容である。

「制作者日記を書こう」は、ゲーム性を強くするために、班の中で季節決定係、時刻決定係、など全員に係を割り当てて必要なキーワードを集めていくようにした。班の話合い活動については学校やクラスによって活動内容が違うので、中学生の実態にあわせるとよいだろう。また、水墨画の制作を前提とした鑑賞教材として考えたが､水墨画でなくてもどんな美術作品にも活用できるものとなった。

(5)　水墨画・白描画に関する教材について

一般的に墨で描く作品には、水墨画と白描画がある。

┌ 水墨画－墨画：墨の色（赤墨・青墨）と水で濃淡をつける
│　　墨画淡彩：墨が主だが、色が淡く入っている・・・「秋夕」「杜鵑」（掛け軸）
└ 白描画－墨の濃淡はなく、線だけで表されている・・・「鳥獣人物戯画」（絵巻物）

水墨画を授業で取り入れるときは、墨と水だけで濃淡をつけた画を取り上げた方が誤解がない。

水墨画・白描画に関する教材について以下の様にまとめた。

1　水墨画（秋夕・杜鵑）・白描画（鳥獣人物戯画）の鑑賞について関心意欲を高める
○美術の授業（水墨画制作・絵巻物制作）につなげる参考資料として
○学校行事（地域の偉人・地域の美術館の活用）

福井出身で橋本左内の肖像画を描いた島田墨仙・横山大観の作品は県立美術館所蔵品
○他教科（社会・小学校国語・総合的な学習）
２　水墨画・白描画の表現の豊かさを理解するために→鑑賞の深まりを目指して
○掛け軸クイズ・・・日本の美的意識を再確認
○制作者日記をグループ作成・・・細部まで見て話し合う（言語活動の充実・学び合い）
○水墨画に挑戦・・・墨と水を使った技法体験（表現と鑑賞の一体化）
○みんなでつなごう絵まきもの・・・絵巻物の理解、昔のあそび
○現代版鳥獣人物戯画・・・白描画の線の豊かさ体験、昔と今の遊びの比較
３　水墨画の表現と制作活動に活かすために→表現と鑑賞の一体化を目指して
○手本を見て描く・・・基本的な描き方を一斉指導
手本を見ながら描きさらに描画法を身に付ける
○造形遊びから・・・・造形遊びから様々な技法を習得
抽象画の制作や想像画等の表現に活かす
○水墨画に挑戦　→　扇子（うちわ）・色紙（色紙箋）・掛け軸・絵巻物に描く
○絵巻物　→　小学校・・・みんなでつなごう絵まきもの
中学校・・・現代版鳥獣人物戯画

Ⅴ　研究のまとめ

巡回研修では、現場の先生方と意見交換する中で、他教科との関連性や連携が大切であると実感し、スライドや準備物などの改良ができた。また、同じ題材でも、子どもの成長段階に合わせていろいろなアプローチの仕方があることにも気付かされた。県内各地には寺社仏閣や歴史遺産、伝統文化が数多くある。地域の美術・文化のよさを味わうことによって、地域を大切にする気持ち、ひいては日本の美術を愛好する気持ちにつながっていくだろう。

研修講座では、県立美術館の所蔵作品や作家についてのエピソードを知ることで、日本美術を身近に感じることができた。屏風、掛け軸、絵巻物を美術の名品としてでなく、身近な日本文化の１つとして取り上げると、教員も生徒も身構えることなく気軽に鑑賞できる。その結果、掛け軸を学ぶスライドができた。身近な文化鑑賞から作品をじっくり見る鑑賞につなげていくために作成した「制作者日記を作ろう」のスライドは、水墨画に限らず名画名品を鑑賞する手段として使えるが、充実した鑑賞にするには授業者の技量と生徒同士が学び合う協働性の必要を感じる。教材開発した掛け軸、水墨画の鑑賞授業については、これから学校や生徒の実態に合わせて検証し、さらなる改良をしていきたい。

最後に、本研究においては、研修講座、巡回研修等に関わってくださった講師の先生方、参加された先生方、県内外の研究会の皆様から貴重な御意見をいただくことができました。心より感謝申し上げます。

《参考文献》

○文部科学省（平成20年８月）『小学校学習指導要領解説　図画工作科編』日本文教出版
○文部科学省（平成20年９月）『中学校学習指導要領解説　美術編』日本文教出版
○日本文教出版（平成23年度用）図画工作　美術
○開隆堂（平成23年度用）図画工作　美術
○光村図書（平成23年度用）国語